

幻 マギ

想 マギ

郷 マギ

孕 マギ

怪 マギ

図 マギ

鑑 マギ

東○project

博○靈○異種姦洗脳孕ませCG集

～其の壱～ ぬえ 鵺

博麗神社の巫女こと博麗霊夢は、今日も生業の一つである妖怪退治に精を出していた。この夜は博麗神社からかなりはなれた寂れた社に出没する鵺が相手だ。強い霊力を駆使する上に、《相手から触れられなくなる》という最強の能力を持つ彼女にとって、千年の昔より存在する大妖怪であろうが物の数ではないはずだった。だが、その社には彼女の力から精度を失わせる類の結界が張っており、闇に身をひそめる鵺の気配を捕らえることができなくなってしまっていた。

鵺 -ぬえ-

『平家物語』などにも登場する、サルの顔、タヌキの胴体、虎の手足、ヘビの尾を持つ妖怪。闇に隠れ、雷雲に乗って移動し、「ヒョーヒョー」という鳥のトラツグミに似た大変気味が悪い声で鳴いたとされる。

霊夢は焦っていた。
「気配がつかめない…
誰かが罫の結界を張ったんだわ」

《触れられなくなる能力》とて
完全な無敵ではない。
相手の攻撃が無効になる時間の間に
息継ぎのような切れ目が
存在するのだ。

そのわずかなスキを見事なまでに突かれて、
霊夢の左足に痛みが走る。
ほぼ同時に空中に引っ張り上げられた。



鳩の尾の毒蛇の部分が足首に噛み付いた後、ロープトラップのように足を吊り上げたのだ。

(しまった……!)

体勢を崩した上半身は、鳩の凶悪な虎手に掴まれ、Y字パランスのような不安定な姿勢で体を固定されてしまった。

「放しなさい、後悔することになるわよ……?」
霊夢は鳩の巨大な顔が間近にあって一切臆することなくにらみつける。



「…え…？」

その時、巨大な肉の柱のようなものが
鶴の股間から伸びてきていた。
（何する気なのよヨイツ…!）

大きい。
霊夢の腕よりも
明らかに太いそれが
何なのかは言うまでも無い。
鶴は私を犯そうとしている…!

必死に霊撃を放とうとするが、
蛇に噛まれたせいなのか、
体がしびれたようになって
一切の抵抗ができない。



既に服はあらかた引き裂かれてしまい、
鶴の男性器を押し付けられた下着は
その布地だけが溶けた様に
消失している。

「ひっ……!」
恐怖におびえる霊夢。
あんなものを挿入されたら
自分の股間が
どうなってしまいかわからない。



既に服はあらかた引き裂かれてしまい、
鶴の男性器を押し付けられた下着は
その布地だけが溶けた様に
消失している。

「ひっ……!」
恐怖におびえる霊夢。
あんなものを挿入されたら
自分の股間が
どうなってしまうかわからない。



脅し文句はおろか、
悲鳴や哀願すら思いつかない。
あるのはただ怖れだけだ。
最強の巫女もこの体勢になつては
もはや凌辱に慄く
可憐で無力な少女に過ぎない。

犯される。
見たこともない異様な形の性器で。

どくんどくと脈打ち、
焼けるように熱い。
処女膜にびつとりと
くっつけられた巨大な龟头から、
オスの臭いと欲情の猛りが
嫌というほど伝わってくる。

「やめて……お願いだから、
ゆるして……！」

恐怖にこわばった喉から、
やっとその言葉だけを搾り出した。



脅し文句はおろか、
悲鳴や哀願すら思いつかない。
あるのはただ怖れだけだ。
最強の巫女もこの体勢になつては
もはや凌辱に慄く
可憐で無力な少女に過ぎない。

犯される。
見たこともない異様な形の性器で。

どくんどくと脈打ち、
焼けるように熱い。
処女膜にびつとりと
くっつけられた巨大な龟头から、
オスの臭いと欲情の猛りが
嫌というほど伝わってくる。

「やめて……お願いだから、
ゆるして……！」

恐怖にこわばった喉から、
やっとその言葉だけを搾り出した。





「は、はあああっ……入ってくるぅ……!」
めりめりと音を立てるようになって、
巨大な肉瘤を思わせる亀頭が
霊夢の体内に侵入する。
息すらできない猛烈な圧迫感に、
巫女はただ全身を震わせて耐えることしか
できない。



「は、はあああっ……入ってくるぅ……」
めりめりと音を立てるようになって、
巨大な肉瘤を思わせる亀頭が
霊夢の体内に侵入する。
息すらできない猛烈な圧迫感に、
巫女はただ全身を震わせて耐えることしか
できない。



ずちゅずちゅという
淫猥な音を立てて、
霊夢の体の奥にまで
肉柱が打ち込まれている。

「あぐらっ！うっ、うっ……
いやあああ……！」

処女の証である鮮血が、
一筋二筋、滑らかな線を
白い太ももに描いている。



ずちゅずちゅという
淫猥な音を立てて、
霊夢の体の奥にまで
肉柱が打ち込まれている。
「あぐらっーうっ、うっ……
いやあああ……！」



ずちゅずちゅという
淫猥な音を立てて、
霊夢の体の奥にまで
肉柱が打ち込まれている。

「あぐらっ！うっ、うっ……
いやあああ……！」

処女の証である鮮血が、
一筋二筋、滑らかな線を
白い太ももに描いている。



ずちゅずちゅという
淫猥な音を立てて、
霊夢の体の奥にまで
肉柱が打ち込まれている。
「あぐらっーうっ、うっ……
いやあああ……！」

どれほどの間
この怪物に犯された
だろうか。

体内に入れられた
生殖器がその熱さを増し、
射精も程近いと
思われた時、
異様な感触と共に、
霊夢の腹部が
ぼっこりと盛り上がった。

「嘘…これってまさか…」

信じ難いことだった。
子宮内にまで巨大な
ペニスが侵入し、
悦楽を貪っているのだ。

このままでは直接
胎内に射精される。

本能的な恐怖に駆られ、
霊夢は悲鳴をあげた。



どれほどの間
この怪物に犯された
だろうか。

体内に入れられた
生殖器がその熱さを増し、
射精も程近いと
思われた時、
異様な感触と共に、
霊夢の腹部が
ぼっこりと盛り上がった。

「嘘…これってまさか…」

信じ難いことだった。
子宮内にまで巨大な
ペニスが侵入し、
悦楽を貪っているのだ。

このままでは直接
胎内に射精される。

本能的な恐怖に駆られ、
霊夢は悲鳴をあげた。



どれほどの間
この怪物に犯された
だろうか。

体内に入れられた
生殖器がその熱さを増し、
射精も程近いと
思われた時、
異様な感触と共に、
霊夢の腹部が
ぼっこりと盛り上がった。

「嘘…これってまさか…」

信じ難いことだった。
子宮内にまで巨大な
ペニスが侵入し、
悦楽を貪っているのだ。

このままでは直接
胎内に射精される。

本能的な恐怖に駆られ、
霊夢は悲鳴をあげた。



どれほどの間
この怪物に犯された
だろうか。

体内に入れられた
生殖器がその熱さを増し、
射精も程近いと
思われた時、
異様な感触と共に、
霊夢の腹部が
ぼっこりと盛り上がった。

「嘘…これってまさか…」

信じ難いことだった。
子宮内にまで巨大な
ペニスが侵入し、
悦楽を貪っているのだ。

このままでは直接
胎内に射精される。

本能的な恐怖に駆られ、
霊夢は悲鳴をあげた。





「それだけは…それだけはやめてええ！
嫌ああああ！」

どぶっ…どぶううっ！

哀願空しく、清らかな巫女の
子宮内に、直接汚液が
ぶちまかれてしまった。

「あ、ああ、射精^だされ、てる……」

とりかえしがつかない喪失感、
一生忘れないかもしれない
汚辱感に、霊夢は泣き叫ぶ。



「それだけは…それだけはやめてええ！
嫌ああああ！」

どぶっ…どぶううっ！

哀願空しく、清らかな巫女の
子宮内に、直接汚液が
ぶちまかれてしまった。



「あ、ああ、射精^だされ、てる……」

とりかえしがつかない喪失感、
一生忘れないかもしれない
汚辱感に、霊夢は泣き叫ぶ。



「それだけは…それだけはやめてええ！
嫌ああああ！」

どぶっ…どぶううっ！

哀願空しく、清らかな巫女の
子宮内に、直接汚液が
ぶちまかれてしまった。



「あ、ああ、射精^だされ、てる……」

とりかえしがつかない喪失感、
一生忘れないかもしれない
汚辱感に、霊夢は泣き叫ぶ。



「それだけは…それだけはやめてええ！
嫌ああああ！」

どぶっ…どぶううっ！

哀願空しく、清らかな巫女の
子宮内に、直接汚液が
ぶちまかれてしまった。



「あ、ああ、射精^だされ、てる……。」

とりかえしがつかない喪失感、
一生忘れないかもしれない
汚辱感に、霊夢は泣き叫ぶ。

「あ……
うう……」
うつろな目で
泣き続ける霊夢。
こんな妖怪にレイプされた。
しかも膣内射精どころではない、
子宮内射精で。
屈辱と恐怖で
全身の震えが止まらない。

鶴の顔は猿に似ている。
精液も猿に似た性質を持っているのか、
空気に触れた部分がポンドの
ように硬く変化し、
栓となって精液が子宮から
漏れないようにしている。

ヴァギナプラグという
類人猿の精液に見られる特徴だ。
受精率を上げるための工夫であることなど、
霊夢は知る由もない。



「あ……
うう……」
うつろな目で
泣き続ける霊夢。
こんな妖怪にレイプされた。
しかも膣内射精どころではない、
子宮内射精で。
屈辱と恐怖で
全身の震えが止まらない。

鶴の顔は猿に似ている。
精液も猿に似た性質を持っているのか。
空気に触れた部分がポンドの
ように硬く変化し、
栓となって精液が子宮から
漏れないようにしている。

ヴァギナプラグという
類人猿の精液に見られる特徴だ。
受精率を上げるための工夫であることなど、
霊夢は知る由もない。



屈辱的な敗北と凌辱から10日。
霊夢は今日も床に伏せていた。
あの後、鶴はいずこともへなく去ったものの、
霊夢の力はショックのせい、以前の1割ほども出なくなってしまった。
ことがことだけに誰に会う気もせず、
痛みかかった心を癒すように深い眠りに落ちていた。

鶴との戦いに敗れたのはその場所に仕込まれた呪いが原因だ。
どこかに、それを仕掛けた奴がいるので油断は出来ない。

力が弱まったとはいえ博麗の巫女。力が回復するまで
その敵から身を守るために、強力な結界を張ってから
休んではいたのだが、
敵が結界の範囲内、社の中にあらかじめ
息を殺して潜んでいることまでは見抜けなかった。

～鉄鼠～

平家物語、源平盛衰記等に登場する。
平安時代の僧侶、頼豪が怨念をつのらせた挙句、
大鼠とも人間とも付かぬ悪鬼のごとき姿の妖怪となったもの。
呪詛の力に長け、鉄の牙、石の体を持つとも言われる。
経文を食い荒らしたり、無数のネズミを使役する能力も持つ。
妖怪を主題とした絵巻物等にもしばしばとりあげられる。

心身に深い傷を受け、寝込んでいる霊夢。
しかしすぐそばに妖怪の気配があっても
目を覚まさないのは異常といえた。

(ふふ、よく寝ておるわい…)

(この龍涎香と沈香を混ぜ、
秘伝の成分を加えた香の力は
大したものじゃ。)

巨大な鼠のような、しかし
人間の姿をとどころ残している
異形の妖怪、鉄鼠。

鶴との戦いの敗因を作ったのも、
巫女が自覚めないような香を焚いたのも、
この怪物の仕業だった。



布団をはだけると、
意外なほど豊満な肉体が、
薄い夜着に包まれて
鉄鼠の鼻先に現れた。

霊夢はあられもない角度に
足を開かれつつも、
深い眠りの中、身じろぎもしない。





布団をはだけると、
意外なほど豊満な肉体が、
薄い夜着に包まれて
鉄鼠の鼻先に現れた。

下着の類は何もつけておらず、
無毛の割れ目までもを
侵入者たる鉄鼠の視界に
無防備に晒している。

霊夢はあられもない角度に
足を開かれつつも、
深い眠りの中、身じろぎもしない。



布団をはだけると、よほど暑くて寝苦しかったのか、霊夢は禪以外身につけていなかった。

「あんな目に遭ったばかりというのに間が抜けているのう…」


鉄鼠はニヤニヤ笑いながら薄布に隔たれた霊夢の性器を想像し、情欲を滾らせる。



湯浴みをして
そのまま布団に倒れこんでしまったのか、

布団をはぐと
霊夢はリボン以外何も身につけていない
状態だった。

鉄鼠は凌辱におあつらえ向きだと
舌なめずりする。




長く分厚い、悪臭のする舌で、
唾液をすりこむようにしながら、

鉄鼠は霊夢の割れ目を
舐め始めた。

一人と一匹の荒い息だけが、
深夜の寝室に響く。

べちやべちやになるまで
股間を舐めまくられても、
霊夢は一切の抵抗を見せない。

徐々に巫女の頬が紅潮していつているのを
鉄鼠は闇を見通すその大きい瞳で
確認している。




長く分厚い、悪臭のする舌で、
唾液をすりこむようにしながら、

鉄鼠は霊夢の割れ目を
舐め始めた。

一人と一匹の荒い息だけが、
深夜の寝室に響く。

べちやべちやになるまで
股間を舐めまくられても、
霊夢は一切の抵抗を見せない。

徐々に巫女の頬が紅潮していつているのを
鉄鼠は闇を見通すその大きい瞳で
確認している。




長く分厚い、悪臭のする舌で、
唾液をすりこむようにしながら、

鉄鼠は霊夢の割れ目を
舐め始めた。

一人と一匹の荒い息だけが、
深夜の寝室に響く。

べちやべちやになるまで
股間を舐めまくられても、
霊夢は一切の抵抗を見せない。

徐々に巫女の頬が紅潮していつているのを
鉄鼠は闇を見通すその大きい瞳で
確認している。



長く分厚い、悪臭のする舌で、
唾液をすりこむようにしながら、

鉄鼠は霊夢の割れ目を
舐め始めた。

一人と一匹の荒い息だけが、
深夜の寝室に響く。

べちやべちやになるまで
股間を舐めまくられても、
霊夢は一切の抵抗を見せない。

徐々に巫女の頬が紅潮していつているのを
鉄鼠は闇を見通すその大きい瞳で
確認している。

「せっかくでかい乳房があるんじゃない、
楽しませてもらわんとどう」

鉄鼠は霊夢の上に馬乗りになると、
20センチ以上あるうかという
ペニスを、白いマシユマ回のような
巫女的美乳で挟み込んだ。

「う、ううん……」
霊夢は鉄鼠の体の重みに反応してか、
苦しそうなうわ言を口にする。



「せっかくでかい乳房があるんじや、
楽しませてもらわんとのう」

鉄鼠は霊夢の上に馬乗りになると、
20センチ以上あるうかという
ペニスを、白いマシユマ回のような
巫女的美乳で挟み込んだ。

「う、ううん……」
霊夢は鉄鼠の体の重みに反応してか、
苦しそうなうわ言を口にする。



霊夢が起きれば弱まっているとは言え、相当なダメージの霊撃を食らわせられるかもしれない。

そんなことをまるで考えていないような信じられない大胆さで鉄鼠は腰を使い、乳房を互い違いにすり合わせるようにしながら自在に巫女の胸を犯している。

無意識に抵抗しようとする手を膝で押さえ込み、一気に射精寸前まで昇りつめていく。

「お、おお、射精すぞ、射精すぞ博麗の巫女おおっ！」



霊夢が起きれば弱まっているとは言え、相当なダメージの霊撃を食らわせられるかもしれない。

そんなことをまるで考えていないような信じられない大胆さで鉄鼠は腰を使い、乳房を互い違いにすり合わせるようにしながら自在に巫女の胸を犯している。

無意識に抵抗しようとする手を膝で押さえ込み、一気に射精寸前まで昇りつめていく。

「お、おお、射精すぞ、射精すぞ博麗の巫女おおっ！」





오빠가 좋아



霊夢の愛らしい顔を
顔面射精で徹底的に汚した後、
鉄鼠はいよいよ
巫女を強姦する準備に入った。

乳首を舐めても、陰唇をまさぐっても、
起きる気配はない。
抵抗する権利すら奪う
睡眠姦の愉悦に心躍りながら、
可憐な女性器に陰茎を押し付けた。



霊夢の愛らしい顔を
顔面射精で徹底的に汚した後、
鉄鼠はいよいよ
巫女を強姦する準備に入った。

乳首を舐めても、陰唇をまさぐっても、
起きる気配はない。
抵抗する権利すら奪う
睡眠姦の愉悦に心躍りながら、
可憐な女性器に陰茎を押し付けた。

アッ!





ずぶずぶずぶ……!

「……っ!は、はあっ……くう……っ!」

奥まで一気に挿入すると、
霊夢はわずかに身をよじった。
快楽をはっきり感じているのが
表情から見て取れる。

一切の容赦なしにピストン運動をすると、
巫女は叫び声すら上げそうになる。

だが、香の効果は強く目覚めるには至らず、
無抵抗な膣肉は
愛液をたっぷり分泌しながら、
男のものを締め上げ、吸い上げている。



ずぶずぶずぶ……!

「……っ!は、はあっ……くう……っ!」

奥まで一気に挿入すると、
霊夢はわずかに身をよじった。
快楽をはっきり感じているのが
表情から見て取れる。

一切の容赦なしにピストン運動をすると、
巫女は叫び声すら上げそうになる。

だが、香の効果は強く目覚めるには至らず、
無抵抗な膣肉は
愛液をたっぷり分泌しながら、
男のものを締め上げ、吸い上げている。

「あふううっ！」
静かな、しかし鋭い悲鳴を霊夢が上げると同時に、
鉄鼠が全身を震わせて巫女の腔内に
射精した。

汚らしい、妖怪のザーメンが
どくんどくと流れ込む。

霊夢が無抵抗なのをいいことに
交尾を完遂した鉄鼠は
ニヤニヤ笑っている。

何回かに分けて
子宮内に子種汁を
注ぎ込む。



「あふううっ！」
静かな、しかし鋭い悲鳴を霊夢が上げると同時に、
鉄鼠が全身を震わせて巫女の腔内に
射精した。

汚らしい、妖怪のザーメンが
どくんどくんと流れ込む。

霊夢が無抵抗なのをいいことに
交尾を完遂した鉄鼠は
ニヤニヤ笑っている。

何回かに分けて
子宮内に子種汁を
注ぎ込む。



容赦ない種付けにより
霊夢の子宮は
鉄鼠の精液で
完全に埋め尽くされてしまった。
「具合がええのお…ヒヨヒヨヒヨ」
気色わるい高い声で
嘲笑する妖怪。



容赦ない種付けにより
霊夢の子宮は
鉄鼠の精液で
完全に埋め尽くされてしまった。
「具合がええのお…ヒヨヒヨヒヨ」
気色わるい高い声で
嘲笑する妖怪。





「さて、そろそろ本気で犯るかの」
鉄鼠がそう言うや否や、
ペニスの太さが一気に二倍近くにまで
膨らんだ。

「う……………う、うあ、ああ、
…あああああああ！」

霊夢がたまらずに目を覚まし、
絶叫を上げる。



「さて、そろそろ本気で犯るかの」
鉄鼠がそう言うや否や、
ペニスの太さが一気に二倍近くにまで
膨らんだ。

「う……………う、うあ、ああ、
…あああああああ！」

霊夢がたまらずに目を覚まし、
絶叫を上げる。

何に犯されていているのかもわからぬまま、
精液を顔と体内に既にぶちまかれている
霊夢は、意識が無いうちに
存分に体に溜め込まされた快樂が
爆ぜるように、
すさまじい勢いで絶頂を迎えた。

「ん、いっちやう、いぐ、あふ、
うううううううう!!」



何に犯されていているのかもわからぬまま、
精液を顔と体内に既にぶちまかれている
霊夢は、意識が無いうちに
存分に体に溜め込まされた快樂が
爆ぜるように、
すさまじい勢いで絶頂を迎えた。

「い、いっちやう、いぐ、あふ、
うううううううう!!」





霊夢は無惨に膨らんだ腹を
周りの男達に晒しながら、
鳥居の柱に裸で縛り上げられている。

周りの人間は一人残らず
催眠状態にかかっているようで、
ぼんやりと霊夢を見つめている。

神社の鳥居というのは神が止まる場所であると同時に、
この世と幽界、異界との境目である。

そういった力が留まりやすく、どちらとも属さない空間こそが
「はざまのもの」が産まれる場所としてふさわしいのだと、
鉄風が私を柱に縛りながら、博識を鼻にかけた顔で言っていた。

産まれる場所。

そう、自分は妖怪の子を
産まされるのだ……。

「ほ、ほときなさい、ほときなさいよっ」

「いい孕み腹じやのう、さてどっちが産まれるか
こいつらに見られながらひり出すがいら」

「う、産まれるって、そんな…まだ二週間しか経ってないのに…!？」

「妖怪の子じゃぞ、おぬしくらい靈力が高いものなら
すぐに胎児も成熟するんじゃないよ」

「へ……」



「いやだよお…産むのいやあ…
わたしこんなことのために生きてきたんじゃないのに…!」

「やはり霊力がずば抜けているだけあって、育ちが早いのうち
腹奥から相当高い霊格を感じるぞい」

「いきみたくなくなってきたじやろう、ワシが取り上げてやるから
頑張ってひりだすんじや」

「い、いやああああ!!」



メリメリ……ツ！メリイイツ！

「ぐわんぐわん……ぐわんぐわん、ぐわんぐわん……」

「おお、出てきよった。こいつは鳩の子じやな」



「おお、ちやんとワシと霊夢ちゃんの
愛の結晶も出てきたぞい」
「い、いやああああ……」

「涙まで流さなくても……
おお、ワシにソックリの汚い顔をしておる」
「う、うぐう……妖怪の赤ちゃん、いやあ……」



「母親に似ればよかったのだから。
ともあれ、これで名実ともに夫婦じゃな」
「夫婦……？ アンタと私が！？」 ふざけ……ないでよ……」

「さて、 ちと借しいがこの子を使ってお前さんに呪いをかけるとするか」

「……呪い？ 何のために……」

「犬神術みたいなものじゃ、 乳を吸いたがる仔を飢えさせ、
その純粋な思いを呪力に変えるんじゃよ」



「ワシの人生を賭けた趣味である半妖コレクションでどうしてもそろわな
モノがあったてな…基本的には名だたる一流妖怪の連中じゃ」
「並の人間の卵子ではそやつらの強すぎる靈力に耐えられないんじやよ」
「……」

「そこでお前さんの出番じゃ。
何匹かの妖怪のところに outward に、子種を絞ってきておくれ。」

「そしてこの子らのようにしっかり孕んで産んで、
ワシのコレクションを充実させて欲しいんじやよ。」

「何心配は要らん、
あつという間にしわしわになったりしないように
手は講じてある。」

「嫌…」

「早速始めなれ」



ほどなくして、鉄嵐との間の子は霊夢の目の前から消え、
並みの方法では解くことが不可能な
強力な催眠がかけられた。

「先生……霊夢言われたとおりがんばります……！」

「よしよしい子じゃ、優秀な助手になってくれそうじやの
さて、消耗した霊力を補うために
こやつらにたくさん犯してもらおうとええ。」

「霊力と生命力が射精と共に流れ出すような禁術を施してある。
お前さんの体もすぐ戻るし、子宮も腫も人間以上のものを孕むにふさわしい
よりいっそう高い霊格を得られるはずじゃ。」

「わかりました。皆さん、来て、霊夢の中に……」





上半分 男達の精力を吸い取ることで完全に回復した霊夢。

変異を解決、妖怪退治の振りをして、わざと隙を見せては喜んで狙されたり、弱い妖怪の場合はその貞操を奪ったりと、かつての霊夢では考えられない淫蕩さをみせるようになっていた。

～しょうけら～

『百怪図巻』『画図百鬼夜行』に絵が残っている妖怪。緑色のウロコに覆われている小さな体格。どのような妖怪かは推測の域を出ないが、民間信仰においては、庚申待の行事に「しょうけら」の名がある。庚申待とは、人間の体内に三尸という虫がおり、庚申の夜に天へ昇って天帝にその人の罪を報告し、天帝はそれによりその人の命を奪うとされていることから、庚申の夜は三尸を体外に出さないよう眠らずに過ごす行事である。この行事の目に早く寝た者は害をこうむるといい、この害を避けるために「しょうけらはわたとてまたか我宿へねぬぞたかぞねたかぞねぬば」と呪文を唱えると良いと伝えられているため、しょうけらとは庚申待において人間に害をもたらす妖怪と見られている

「ほくらはいつちやった…嬉しい? 大好きな霊夢さんのお〇んこだよ〜♪」

「う、うう…確かに覗き見はしてましたけど、うういうことがしたくてというわけでは…」

「天帝とか閻魔様に罪を報告するってやつ? だったらどうして着替えとかお風呂のときだけ君の気配がしたのかな〜」

「う、うう……」

「気持ちいい？折角だからいっぱいサービスしてあげるね」
「あ、ありがとうございます、本当にその……」

「……その、何？」
「気持ちいいです……」

しょうけらは戸惑いながらも
霊夢の肉体に溺れ始めている。
巫女はくすくす笑いながら
妖怪の体の上で腰をいやらしく動かしている。

「も、もう駄目です、射精ます、霊夢さんっ！」

「すぐに出さないでいっばいピストン頑張ってからにしないかい！」

「は、はっっー！」

「そう、その調子、

もっと思いきりして大丈夫だから！」



霊夢の励ましに応えて

力の限り腰をつきあげるしようにけら。

鬼教官とその教え子のような

一種の絆が生まれてきている。

「やれば…うんっ、できる、じゃない…あはあっ
しょうけらくん……」

「あ、ああっ、すごい気持ちいいです……!」

「私もだよ…もっとももっとしてもいいからね♥」



激しい交わりの後に、ようやく2人の性欲は満足した。

霊夢としようけらの結合部には、おびただしい量の精液だまりができています。

「うふふ、お疲れ様……憧れの霊夢お姉さんをすっかり孕ませた感想はどう？」

「本当に、気持ちよかったし嬉しかったです……上に報告する霊夢さんの罪、ゼロにします」


「本当は逆レイプも加わってちょっと重くなったけどね」
2人は恋人同士のように笑いあった。

しょうけらの次に霊夢が狙ったのは手負い蛇だ。
村の娘が誤って霊格の高い蛇を傷つけてしまい、
変化となって崇めていると聞き、身代わりになると
申し出た。もちろんただ倒そうなどと思っていない。
蛇のメスが出すフェロモンと似た成分の膏薬を体に塗り、
犯されることが目的だ。

～手負い蛇～

人間に手負いにされた蛇はどんな手を使っても
復讐を果たしにやってくるというから、
蛇だけは絶対に逃がしてはならないという。
蛇を殺したことに罪悪感を感じている者の所にだけ
現れるとも言われる。





屋敷の人間にばれないように、
樹上で裸になる。
靴下と靴、そしてリボン以外を
身につけていない姿は
痴女以外の何物でもない。

(上手くいくといけれど...)

人を犯せるような

巨大な変化と化すことのできる

蛇自体がほとんどいないので、

相当貴重な子種であることは間違いない。

霊夢は二重の意味で緊張していた。

（よしきた〜！）
霊夢の上っている木の幹と
さほど変わらないサイズの
超犬物がかった。

太ももに巻きついて、しきりに霊夢の
体を探っているようだ。

霊夢は体の力を抜き、
されるがままにまかせている。

もちろん、秘所は

受け入れ態勢が万全だ。

ずぶううう！
「はうっ……！」

異様に冷たく、ぬらぬらした巨根が
霊夢の膣を貫いた。

人と妖の交合が始まっている。
下の住民に気づかれないように、声を殺して
巨根の圧迫感に耐える。



ぬちぬちと音を立てながら、

霊夢の子宮の所まで

蛇のペニスがしっかりと出入りしている。

(あは、よかった…)

この子も満足してくれるかしら…?)

快楽に身を任せつつも、巫女は
相手のことまで気遣っている。

予想外なことに、
霊夢の後ろの穴にまで、
蛇の責めが行われた。

「ふあああああつ！」

冷たい生殖器と尻尾で二穴を貫かれ、
未体験の感覚に叫び声を上げてしまう。



「むぐうつ！」

下半身に気をとられているスキに、
霊夢の頭を大蛇がぱっくりと銜えた。

息ができなくなる窒息感、
前後の穴をふさがれる圧迫感、
全ての感覚が
性感に繋がって、
感じたことのない絶頂へと
巫女を導いていく。





「あぐあああああっ！」

膣を埋め尽くす
粘る氷水のような精液の滴。
その奔流がもたらす快感に
霊夢は絶叫した。

セクシィッ

ドクドク



「はあ、はあ……すっぴん……」

大量の精液が
腔に押し込まれ、
霊夢の腹は妊婦のよう膨らんでいる。


しかし、膨らんでいるだけではなかった。
鉄鼠の呪力によって改造をされた子宮は、
通常の何百倍もの速度で
霊夢と蛇の間の子を育てているのだ。

A large, muscular woman with a snake-like body and a young girl with a snake-like body. The woman is the central figure, with a large, muscular torso and a long, dark, scaly tail that loops around her. She has a human-like face with short brown hair and a surprised expression. The young girl is smaller, with a blue, scaly body and a long, thin tail. She has a human-like face with long, flowing hair and a surprised expression. The background is dark and textured.

ほどなくして、
蛇と人間を合わせたような姿の
合いの子が生まれた。

メデューサーとラミアをあわせたような
外見の、愛くるしい子だ。

性別はわからないが、
とても可愛らしい顔をしている。
霊夢はこれなら「鉄鼠先生」も
喜んでくれるだろうと思う反面、
強い母性を感じていた。



霊夢が山をうるついていると、
何か大きな人影が後ろに立ち、
「首を吊らんか」と問いかけてきた。
あえて無視していると、首に荒縄がかけられ、
足がつくかつかないかの高さで
樹のそばに吊り上げられてしまった。

巨大な手で衣服が破られ、
裸にされる。

～青坊主～

日本各地に伝わる一つ目の大入道の妖怪。

青い肌を持ち僧衣を着込んだ巨体で、
各地の伝承によって違いがある。

香川に伝わるものは女性に「首を吊らんか」と誘いかけ、
断れば消えるが、無視していると襲い掛かって女性を気絶させ、
本当に首吊りにしてしまうという。

もしたただ殺そうとするだけならば
戦う必要もあつたるうが、
幸い犯すつもりで襲い掛かったらしい。

「お助けください……！どうか……！」
演技の命乞いをする。

青入道は無言でその丸太のようなペニスを
僧衣の下から放り出す。

あまりの大きさに霊夢は一瞬
めまいを覚える。

ずん



柔らかでしなやかな無毛の秘肉を割って、
肉柱が入ってきた。

「かはあ……っ」

「お、おつきいらい……！」

喘ぎながら、身を震わせる霊夢。
偽りの抵抗が本気になってしまいそうだったが、
首にかかる縄のせいで何も出来ない。

ナリッ
ナリッ

みちっ



青入道が本気でピストンを開始した。

巨大な妖怪と可憐な巫女が
完全に深く繋がっている光景は、
妖しくも美しい。

ニ
ア
ア
ア
ア
ア
ニ

ニ
ア
ア
ア
ア
ア
ニ

「うっ、うあっ…、は、はあっ…！」

息も絶え絶えながらに、
霊夢は動きを青入道に合わせるようたして、
精一杯頑張っている。





「トビキッス」

トビキッス

やぐらのような所に無造作に縄で縛り付けられ、
霊夢は後ろを激しく犯されている。
「あはあっ！だめ、激しい……！」

前の穴はおそらくもう
青坊主の子を孕んでいるのだろう。
確かにこんな肉柱で突いたら
宿ったばかりの命に危険がある。



初めは苦しかった
巨根でのアナルセックスも、
慣れると病みつきになる快樂があった。

自分の尻の筋肉全てを使って、
しごき上げ、搾り取る。
人間相手ではおそらく絶対に不可能と思われる、
極限の拡張感を伴う性交だった。



いつもの性生活に
突然の闖入者が現れた。

ゴブリンだ。
紅魔館にいる卑劣で弱っちい種族。
霊夢の淫らなフェロモンに誘われ
我慢が効かなくなったのだろう。

まあまああの大さきのペニスを
空いている膣にねじ込み、
動物的なスピードで腰を振る。



「うっ…こんな、サイズが違いすぎる相手なのに、
両方とも感じちゃう…っ！」
全身感度が極限まで高められている霊夢は
凌辱に全く抵抗することができない。

「グッ…！」
ゴブリンが霊夢の膣の奥深くに
その汚らしいペニスを突きこむ。



ゴブリンの矮躯から搾り出される
精液の熱さに、霊夢の体は
鋭く撥ねた。

こんな情けない格好で
種付けされた恥ずかしさに、
体が火のように熱く火照ってくる。



射精と同時に、青坊主が害虫でもつぶすような気軽さで、霊夢を犯している最中のゴブリンの頭をぶちっと潰した。

断末魔代わりの強烈な精液のシャワーが、結合部から溢れ出る。霊夢はその精液流に、自分が死んでも孕ませるといふオスの強い意志を感じていた。



すっかり腹も大きくなり、
臨月を迎えている霊夢。

「うう、おなかが苦しい……」

そんな訴えには全く耳を貸さず、
青坊主は今日もアナルレイプに
いそしんでいる。



すっかり腹も大きくなり、
臨月を迎えている霊夢。

「うう、おなかが苦しい……」

そんな訴えには全く耳を貸さず、
青坊主は今日もアナルレイプに
いそしんでいる。



どずん、という
大きなものが落ちる音と共に、
霊夢の足元に
青坊主の子供が
産まれ落ちる。

霊夢は息も絶え絶えになりながら、
きつい出産を終えた自分を
誇るような気持ちになっていた。



どずん、という
大きなものが落ちる音と共に、
霊夢の足元に
青坊主の子供が
産まれ落ちる。

霊夢は息も絶え絶えになりながら、
きつい出産を終えた自分を
誇るような気持ちになっていた。



霊夢が神社の祭壇の掃除をしていると、
黒いぶよぶよした妖怪に取り押さえられた。

その正体が何であるかはすぐにわかった。
黒髪切りだ。

～黒髪切り～

黒髪切り、髪切りとも呼ばれる、
人間の頭髪をヒソカに切るといふ妖怪。
どこからとも無く突然現れ、人が気がつかぬうちに
その人の髪を切るとされる。
人間が獣や幽霊と結婚しようとしたときに
多く出現するとの説もある。



下着とスカートはやすやすと引き裂かれ、
霊夢のぷっくりとした大陰唇が
あらわにされる。
手を押さえている力はかなり強いが、
そんなにしなくても逃げるわけがないのに…と
霊夢は心のうちで呟く。



「すごい……」
期待をこめた熱い視線を、
正面にたつ黒髪切りに向けてしまう。

その黒髪切りのペニスのサイズは、
青坊主にも引けをとらないような
相当の巨根だったからだ。



みっしりと、挿入される。

「オフウウツ……！」

息を全部吐き出すような声で、
受け入れる霊夢。
柔らかい女性器まわりの肉が、
しなやかに押し広げられ、
しっかりと巨根をくわえ込んでいる。



あまりにも大きいペニスでの、
圧倒的な激しさをもつピストン運動。

霊夢は快樂のあまり、
視線すら定まらない状態だ。



「はぐっ！」

黒髪切りの精液が、
霊夢の子宮の奥を叩く。

全身を痙攣させて、霊夢の意識は
闇の中へ落ちて行った。



何度も犯され続けるうちに、
当然のごとく霊夢は妊娠していた。

極太の男性器を受け入れていたとは
にわかに信じ難いような綺麗な割れ目。

だがその腹はしっかりと膨らみ、
左右から丸ごと口に含まれて吸われている
乳房からは、相当な量の母乳が
飲まれ続けている。



何度も犯され続けるうちに、
当然のごとく霊夢は妊娠していた。

極太の男性器を受け入れていたとは
にわかに信じ難いような綺麗な割れ目。

だがその腹はしっかりと膨らみ、
左右から丸ごと口に含まれて吸われている
乳房からは、相当な量の母乳が
飲まれ続けている。



「かはあっ！」
霊夢の可愛らしい割れ目から、
黒っぽいものが突き出ていた。

生まれようとしている。
また新たな、異類婚の子供が。



「かはあっ！」
霊夢の可愛らしい割れ目から、
黒っぽいものが突き出ていた。

生まれようとしている。
また新たな、異類婚の子供が。



這い出てきたのは
エイのような質感の肌をもった、
父親似の子だ。
粘液にまみれたその体はとても暖かく、
乳をもとめてはいずる様は
どことなく愛らしい。


「こんにちは、坊や…」
催眠状態であるがために、異形であっても
全く意に介することなく母性愛を注ぐ霊夢。



這い出てきたのは、
エイのような質感の肌をもった、
父親似の子だ。
粘液にまみれたその体はとても暖かく、
乳をもとめてはいずる様は
どことなく愛らしい。

「いらっしやい、坊や…」
催眠状態であるがために、異形であっても
全く意に介することなく母性愛を注ぐ霊夢。






「コレクション」は順調にたまっている。
滅多に人間とまぐわうことのない妖怪、
人間と性交はするがすぐ殺してしまう妖怪など、
霊夢でなければ捕まえられないようなものとの間に
子を作り、産み落とし、鉄鼠に引き渡す。

そんな日々の疲れを癒すべく、身重の体で
山奥の温泉に来ていた時、
一羽の姑獲鳥が霊夢の孕み腹を犯し始めた。

～姑獲鳥（うぶめ）～

産女、憂婦女鳥とも表記される。
死んだ妊婦をそのまま埋葬すると
「姑獲鳥」になるという言い伝えがある。
凶鳥としての色彩を強く持つ。

羽毛を脱ぐと人間の女性になり、
人間の赤子をさらうなどして害をなすことが
あるという。



「ダメよ、中にいるんだから…
驚いちゃうわ…」

喘ぎ声を上げ、妖しい表情で姑獲鳥の股間の突起を受け入れながら、霊夢は言う。

妖怪の類で両性具有の性質を持つものは決して少なくない。

この姑獲鳥もそういった類のものなのだろうと思っていた



「あはあ…すごい…」

精液と思しきものが
霊夢の膣に大量に注がれる。

快樂に打ち震える霊夢。
深い催眠状態で判断力を失っている彼女に
その後の惨劇など知る由もなかった。



「え…な、何…！？」

姑獲鳥の眼が妖しく光り、
霊夢の体の動きが止まる。

和やかな交尾で快樂を与え合うつもりなど
初めからあるはずがない。
姑獲鳥は子を産むことなく死した妊婦の
怨念から発生するものなのだ。




ずるり……

霊夢は必死に抵抗したが、
とうとうまだ体が出来上がっていない
妖怪の子を、腹から
引きずり出されてしまった。

あまりの心身の苦痛に
昏倒する霊夢。

眼が覚めたときには、
鉄鼠が彼女にかけた催眠は
解けていた。



霊夢が正気に戻ってからの行動は早かった。
体の回復を待つ時間などない。
鉄鼠を一刻も早く捕らえねばと追った。
しかし鉄鼠が逃げ込んだ先は1千年前の鬼達が
棲まう霊山の奥。おびただしい数の妖怪が襲ってきて、
力を使い果たした霊夢は土蜘蛛の糸に絡めとられてしまった。

～土蜘蛛～

蜘蛛が長く生きて変化となったもの。
また別の伝承によると
人前に現れる姿は鬼の顔、
虎の胴体に長いクモの手足の
巨大ないでたちであるという。
いずれも山に棲み、旅人を
糸で雁字搦めにして食ってしまうといわれる。

「は、放しなさいよ……もう正気に戻ったんだから、あんた達と構う暇なんて無いのよ！」

土蜘蛛は笑い声を上げる。
「その札は万一の時の備えのつもりか？余計いやらしく見えるぞ」
「うるさい……」



「確かになければなしの霊力をそれに込めてきたらしいが、
触れなければどうというこどもない。」

「い、いやらしいことをこれ以上しようったって……！」

「汗で少しだけ下のほうがめくれておるぞ」

「あ……！」

土蜘蛛は性器をむき出しにして
霊夢の股間に迫ってくる。

「い、嫌！やめて！寄らないで！！」

ズブズブ……

「ほうれ、入っていくぞい」
「あ、あ……やあああ……」

ズ
ブ
ズ
ブ
ズ
ブ
ズ
ブ

ピ
ク
ッ

ピ
ク
ッ

下のほうがめくれているというのは、

股間に貼った札のことだ。

汗と摩擦で菊座から札がはがれてしまっていたのだ。

「鉄鼠からおぬしのごとは聞いておるぞい、

噂にたがわぬ名器、最高のケツマ〇ヨじやわい」

「いやあ、言わないでえ……！」



い...

あ嫌
あああ
あああ
っ!!

ド
ド
ド
ド
ド

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

尻に思い切り射精され、
霊夢は盛大にイってしまった。

抵抗する力をなくしたところで、
土蜘蛛は妖気をこめた糸で
札の力を中和していく。

3分ほどで蜘蛛にまったくダメージを与えることなく、
胸の札には大穴が、
股間の札は左右に裂けてしまった。



霊夢の上に、新たなもう一頭がのしかかってきた。牙をガチガチ鳴らしながら、ものすごく乱暴に交尾する。

「う、うう……っ そんな、二本もおっ！」
屈辱と快楽の間で
苦悶する霊夢。



上下の土蜘蛛が
回々に嘲る。

「こんなに締め付けて、流石博麗の巫女は
音に聞こえた肉便器じゃわい」
「ケツがそんなにいいののか？」
女子の本分は前の穴で孕むことじゃぞ」

「うう……」


じゅぽっ

じゅぽっ

ズブッ


「さて、そろそろ子種を仕込んでやるとするか！」
「こっちもちや！射精すぞお、博麗の巫女！」
「や、やめ……でえ……」





すっかり膨れた腹。
もう何匹の子供を産まされただろうか。

胸も張り、体が母親になりたがっているのがわかる。
荒い息をつきながら、
霊夢は陣痛に耐えている。



すっかり膨れた腹。
もう何匹の子供を産まされただろうか。

胸も張り、体が母親になりたがっているのがわかる。
荒い息をつきながら、
霊夢は陣痛に耐えている。

「ひぐっううう……!」

メリヨメリヨという音を立てて、
肌色の奇妙な生物が霊夢の秘所から
生まれてきた。

人蜘蛛とでもよべば良いのか、
3対の腕をもつそれは、母親と似た色の
複眼を持っている。



「ひぐっううう……!」

メリヨメリヨという音を立てて、
肌色の奇妙な生物が霊夢の秘所から
生まれてきた。

人蜘蛛とでもよべば良いのか、
3対の腕をもつそれは、母親と似た色の
複眼を持っている。



三匹もそれを産むと、流石に
出産なれしている霊夢も半死半生の
状態にまで疲弊した。

しかし、まだ何匹が残っているようだ。
両方の乳房からあふれる母乳を
気色の悪い生物が嬉しそうにすすっている。

失神寸前ではあるが、
洗脳されていたときと同じように、
慈しみの気持ちで胸に湧いているのを
霊夢は感じていた。






三匹もそれを産むと、流石に
出産なれしている霊夢も半死半生の
状態にまで疲弊した。

しかし、まだ何匹が残っているようだ。
両方の乳房からあふれる母乳を
気色の悪い生物が嬉しそうにすすっている。

失神寸前ではあるが、
洗脳されていたときと同じように、
慈しみの気持ちで胸に湧いているのを
霊夢は感じていた。



土蜘蛛の子を産まされた後の霊夢。
まだ動けない子達は安全そうな場所に隠れさせ、
散らばった衣服を拾い集めると、霊山の奥へと
飛び始めた。
その瞬間に巨大すぎる妖気が後ろから迫り、
完全に手足を固定されてしまった。

～酒呑童子～

多くの鬼を従え、古くは大江山を拠点に京都に出現し、
貴族の姫君を誘拐して側に仕えさせたり、
刃で切って生のまま喰らったりしたという
八岐大蛇が出雲から近江へと落ち延び、
そこで富豪の娘に産ませたのが酒呑童子という伝承もある。

「鉄鼠は……！鉄鼠はどこにいったの!?」
「お願いだから早く渡して!」

「何をそんなに焦っているかは知らんが、
そんなに操られたのが気に食わなかったのか?」

「女として幸せというものだろう、あれほどのオスを
悦ばせ、子種を流し込まれ、愉悦に狂ったのだから」

「……………」

霊夢の脳裏に
処女を鶴に奪われたときの辛さがよぎる。

屈辱、怒り、憎悪……

しかし洗脳を受けてからというものは、
すさまじいまでの快楽が常にあったことは
否めない。

「……？何のつもり……？」

酒吞童子が軽く息を吹きかけただけで、
霊夢の服はホヨリのような破片になって
舞い散った。

「何、鉄鼠の秘術で鍛えられた博麗の巫女なら
ワシのものを入れても死なぬはずと聞いたからな。
人間の女の具合を試してみたいのよ」

「……！」
霊夢の顔面が青ざめる。



不服そうにしていた霊夢も、
自分の胴体と同じか、それ以上の
超巨大ペニスを見てしまうと、
怯えの表情を隠せない。

「なに…それ…そんなの絶対無理…！」

「大丈夫、もし裂けても妖術で繋げてやる」

「そんなの全然大丈夫って言わない!!」



「~~~~~ひいひいひいっ!!」

「おお、入った入った」

電柱より太いものを入れられて、
霊夢は悶絶した。

こんなものをここまで突っ込まれて
生きていられる人間の女は
確かにそうそういないだろう。

「ちと物足りないが良い締めりだ。
さて、動かすとするか……」

「~~~~~あ~~~~~?」

ガスガスという音が実際に頭の中に響く。
横隔膜や肋骨、出産時同様かそれ以上に
左右に開いた骨盤が、鉄塊のような
ペニスとぶつかって音を立てているのだ。

気持ちよかった。
子宮も、膣も、
内臓全てをつかってセックスすることが
こんなにもいいものなのだとは。

忘我の域に達している霊夢は、
大鬼と同時に
絶頂へと向かっていった。

ガスガス
カッス
カッス





しっかりと孕んだ霊夢。

鬼の子が入った腹は
今までで一番
難産になりそうな
形をしている。

双方の霊力が高いために、
ほんのわずかな時間で
臨月を迎えた。



「ぐ……ぐはあああつっ！」
メリイ……メリヨメリヨツッ！

体を引き裂くようにして、
鬼の子が霊夢の胎内から
外へ身を乗り出した。

可愛らしさや弱弱しさは微塵も無い、
若者といった風情の見た目だ。

これから何人もこの子の兄弟を
産まされるのだろうか……
霊夢は焦点の合わない目で
そんなことを考えていた。




「ぐ……ぐはあああつっ！」
メリイ……メリヨメリヨツッ！

体を引き裂くようにして、
鬼の子が霊夢の胎内から
外へ身を乗り出した。

可愛らしさや弱弱しさは微塵も無い、
若者といった風情の見た目だ。

これから何人もこの子の兄弟を
産まされるのだろうか……
霊夢は焦点の合わない目で
そんなことを考えていた。





何人が頭領の子を産まされた後は、
霊夢は部下の牛鬼と馬鬼に下げ渡されることになった。
幾たび孕んでも決して劣化しない彼女の肉体は
最高の褒美になったようだ。

～牛頭鬼と馬頭鬼～

牛頭鬼と馬頭鬼は仏教において地獄で亡者達を責め苛む獄卒。
牛頭鬼は牛の頭に体は人身、馬頭鬼は馬の頭に体は人身という姿をしている。
(本来獄卒のため閻魔大王の配下である)



上下から獣そのもののような
遅しいペニスで霊夢は犯されている。

前と後ろの穴を両方同時に。
いわゆるサンドイッチフアックというスタイルだ。

「しかし博麗の巫女が
こんな肉穴を持っていたとはなあ」

「ガバガバかと思いきや結構しめつけるぜ」

「うーうー……」



「そらっ射精すぞ！」

「こっちもだっ！」

「ひゃううううっ！」



「しっかり呪術でいじられてるとはいえ
簡単に孕むなあコイツ」

「別の生物みたいでキモいな」

「す、好きでこういうからだにされたわけじゃ…」



「う、うおっ…射精るっ…！」

「あ、あ、あああ……」

「そろそろ出てきそうだから抜いておいてやるよ」
「優しいなあ俺達。お礼は？」

「あ、ありがとう、助かるわ…ふぐあっ！」
「すげえ、いきみで母乳出てきてるよ」



「…か…かひゅっ…ふああああ…」

霊夢の膣口が別の生物のように
しなやかに動き、
ブタに似た「仔」を産み落とした。

「どっちの子だこりやあ…？」
「ブサイクでちよっとわかんねえなあ」

軽回を叩く父親達。

豊かな乳房から母乳を噴出しながら、
息も絶え絶えで巫女は喘ぐ。

霊夢は牛鬼、馬鬼の子を産んだ後は
彼らの持ち馬である妖馬に犯されていた。
なんでもこの後に相手をする巨大な妖怪に
壊されないように、慣らしておくらしいが...

～八岐大蛇～

8つの頭と8本の尾を持ち、眼はホオズキのように真っ赤で、
背中には苔や木が生え、腹は血でただれ、8つの谷、8つの峰に
またがるほど巨大とされている。

毒の息を吐くとする資料も存在する。

出雲の妻伊川上流に根城を構え、土地神の娘を毎年ひとりずつ
生贖にとっていたが、酒に目がないという弱点をスサノオノミコトに利用され、
討たれた所を全ての首を落とされて退治される。

このとき大蛇の尾から出てきた剣が天叢雲剣、別名草薙剣である



乳にクラーゲのような材質でできた
弾力性のある袋をつけられ、
馬に良く似た妖怪に
前後の穴を犯されている霊夢。

足を触手で固定され、
逃げることも動くこともままならない

「くっ…すごく深いっ…」



「んおっ……ほおおおおっ！」

前後の穴で同時に爆発的な射撃。子宮も直腸も、熱湯で焼かれるような感覚すらある。



「いぼおおおっ！」

直腸に注がれた精液の量が、
あまりにも多すぎたために、
霊夢は口から盛大に
精液の滝を吐きこぼした。





タプンタプンと腹に精液をためた状態で、
巨大な妖気が迫ってくるのを感じている霊夢。

これは…一体なんだろうか…？
不安に駆られるも、何一つ
できることはない。

「ぐ…ぐ…ぐ…ふっ…!!」

ヤマタノオロチだ。

はるか昔にスサノオに斬られた首が
いまだにそのまま、霊格は相当落ちてはいるが、
女好きなところは変わっていないようだ。

ひどい匂いのする性器を
前にも後ろにも、口にも、そして胸の谷間にまで
挿入され、霊夢は苦痛のうめき声をもらす。



「は…はあううっ！」

おびただしい量の精液が、
巫女の体内に注がれた。

「と、止まらない…どっまでだすのお…」



口も鼻も噴出する精液にふさがれ、呼吸は全く出来ない。

精液の高圧洗浄機を体内に突っ込まれたかのように、内側全てを滝のような白濁で洗われている状態がもう相当な時間続いている。

(ちよっと待って……
こんなの本当に死ぬ……)

意識が暗くなり、霊夢は失神した。





霊夢は自分の母乳が
クラゲのような素材の容器に
こぼれる音で眼を覚ました。

体は綺麗に清められ、
凌辱の跡はないといたいところだが、
腹はカエルのように膨らんでいる。

陣痛の痛み。
意識を集中してその時に備える。

するり、という感触と共に、
その娘は今までで一番優しく霊夢から出てきた。


オロチと霊夢の両方の霊力を
完全に受け継いだ
とても美しい女の子だ。
見たこともないレベルの
強い力を持っている。

「ごめんね、大丈夫だった？母様…」
下半身がまだ霊夢の中に残っているままで、
その娘は気遣わしげな挨拶をした。

霊夢が鉄鼠を追っていた理由が、
コレクションとして剥製にされるかもしれない
自分の兄や姉を取り返すためだと
その娘は知っていた。

傷つき疲れ果てた霊夢を
いとも簡単に追っ手を振り切って
神社に連れ帰った後、
たったの二日ほどで10何人もいる
兄弟たちを、オロチの血が混じった末妹は
無事に連れ帰ってきた。





博麗神社の裏山の一角で、
今日も淫靡な夜会が開かれている。
里の女子を息子たちが襲うことのないように、
彼らが分別がつくようになるまでの間、
霊夢が性処理を引き受けているのだ。

そこには朗らかな明るさのようなものがあり、
近親相姦的な背徳感はまるでない。
人間には人間のモラル、妖怪や半妖には彼らなりのやり方があるのだと
霊夢は思っている。

～半妖～

人間と妖怪の混血を意味する言葉。
古くから日本の民話伝承等で妖怪と人間の子が生まれることは多いが、
基本的にはその子らは人間の姿で、特別な力などは持たないことが多い。
しかし特殊能力をもつ半妖の例外として、
キツネの化身と人間の子が、後に陰陽師として力を振るうようになる安部晴明の
ようなものもいる。

青坊主の子が後ろの穴、
しょうけらの子が手コキ、
オロチの娘は霊夢の体を支えている。

「来ていいよ…」

優しい母親、とは言い切れない
淫らなものを少しだけたたえた笑顔で、
霊夢は他の息子達に呼びかける。

既に腹は連日の交わりで
精液でいっぱいになっている。



黒髪切りの子と、
鉄鼠の子が、同時に
霊夢の、母親の
愛らしい形の性器に自分のものを突っ込む。

娘が流石に心配して声をかける。
「か、母様…大丈夫そんなの？」



「心配要らないよ、平気。」

「でも…うわ、すっごい…」

パットのようなたさの生殖器が
自分の母親に出入りしているのをみると
やはり恐ろしいような気もしたが

そもそも自分の父親の8本だか9本だかの
ペニスと子作りして生きてたのだから
確かに平気なのかもしれないと
半妖の娘は思いなおした。




「あ、あはああっ」

母乳を散らせながら、霊夢は両方の穴に精液を打ち込まれている。

(子供との間にさらに子供できたらその子は子だけど孫って感じになるのよね…変なの)

オロチの娘は霊夢の絶頂の痙攣を尾で感じながらどうでもいいことを考える。





本来、自分たちは
鉄鼠のコレクションとして剥製にされるか、
それとも売られるかの運命だったはずだ。

望まぬ妊娠だったにもかかわらず
自分達を懸命に守り、育ててくれている霊夢
半妖達はそんな母様が大好きだった。

今日も異形の家族は
平和な時を過ごしている。